

MEETING REPORT

Keystone Symposiumに参加して

(Molecular Mechanisms in DNA replication and recombination)

分子生物学研究部

佐藤 憲子

2月中旬にNew Mexico州Taosで開かれたKeystone symposiumに参加しました。私にとりましては、二度目のKeystone symposiumでしたが、今回はMolecular mechanisms in DNA replication and recombinationというテーマで、前に参加したSignal transductionの場合とは場所も集まる研究者も全く異なりました。

Taosは周辺に砂漠が続くコロラド高原南側のスキーリゾート地で、レッドチリをつり下げたマッドハウス（土造りの家）、アメリカインディアン文化、乾いた空気と砂ぼこりが印象的な小さな市です。私たちが訪れたときは快晴続きで、近くでスキーができるとは思えないほど暖かでした。

Symposiumは、朝と夜に8時から11時まで講演があり、昼は3時からのworkshopとポスター発表で構成されています。今回は、前半が主に大腸菌、ファージのDNA複製の詳細な分子機構について、後半がDNA組み換えというプログラムでした。原核生物のD



NA複製については、DNA蛋白質酵素群の反応機構、酵素の立体構造と機能についてが議論の中心でした。真核生物の染色体複製については、Bruce Stillman博士を含む4人のスピーカーが、主に酵母の系について講演しました。

分子生物学研究部からは、正井助教授が出芽酵母CDC7と分裂酵母HSK1について、私が高等真核生物のCDC7関連キナーゼについてのポスター発表を行いました。高等真核生物のDNA複製の研究者の参加が少なかったとはいえ、私がポスターをセットしている最中に見に来てくれました。お互いの発表時間が重なっているので、早

めにポスターを準備して議論することができて良かったと思います。

最終日の前の晩banquetでは、Jerard Hurwitz博士と同じテーブルで、多少緊張しながらの食事となりました。そのあとはダンスの時間が続き、生バンド演奏の大きな音をバックに研究者同士が交流を深めました。

最後になりましたが、今回医科研国際交流基金の援助をいただいて本学会に参加できたことを感謝し、厚く御礼申し上げます。

写真：会場に向かう途中St. Cathedralの前で—Dr. Kogoma（右）、Dr. Bate（中央）、筆者（左）

編集後記

医科研NOWもスタートしてちょうど2年になり、第12号をお届けします。これまで皆様のお力添えを頂き、記事の滞りもなく発行できました事を素人集団の編集委員一同、心よりお礼申し上げます。

さて本号では4月に就任された吉田新所長の挨拶を掲載いたしました。また1月から新しく医科研に来られた方々を紹介しております。とても良く撮れている方、写真より実際の方がもっと良い方、そうでない方など様々と思いますが、いずれもすでに医科研で

活躍されているフレッシュな仲間達です。新年度に入って編集委員のメンバーとして新しい方に加わって頂き、内容の充実を計りたいと考えています。また新しい企画についても皆様のアイデアをお願いしたいと思いますのでぜひご意見をお寄せ下さい。㊦